

テレビ的「知」の考察
— 『クイズ面白ゼミナール』を事例に (2012)
What "TV knowledge" is ?
- A Case Study "Quiz Omoshiro Seminar" (2012)

山崎 晶¹
Aki Yamasaki

¹四国学院大学総合教育研究センター
Shikoku Gakuin University Center for Research and Development for Higher Education

要旨…本報告では、『クイズ面白ゼミナール』における解答者、ならびにフロア視聴者の誤答の際のリアクションに着目し、1980年代におけるテレビ的な「知」または「教養」のあり方の特徴を分析する。解答者を類型化した結果からは、それぞれ視聴者の立場を代弁し、理解を深め、共感を引き出す役割が確認され、また、全般的な傾向としては、解答者の誤答が視聴者の安心感を満たす効果を果たしていることが浮き彫りになった。

キーワード テレビ、クイズ番組、内容分析、日常の知、博知化

1. はじめに

本報告は、クイズ番組の内容分析を通して、1980年代後半の日本社会において、人びとが何を「知的」と捉えていたのか、その一端を明らかにしようと試みるものである。

よく知られるように、映像と音声で情報を届けるテレビは、その草創期から人びとの思考力や想像力を奪い、「(一億総)白痴化」に至らしめるものだと盛んに論じられてきた。そして、放送開始から約60年が経過する現在でも、テレビがもたらす害を説く「テレビ有害論」は後を絶たない。しかしその一方で、「教育テレビ」という言葉が体現するように、テレビはその草創期から、(学校)教育を補助するものとしても構想され、視聴者の知的好奇心を刺激するものでもあった。なかでも興味深いのは、佐藤卓巳が指摘するように、視聴者が実際には行ったことのない場所であっても、「ハワイ」と言われれば「リゾート地」や「ハイビスカス」といったイメージが想起できる「博知化」を、テレビが推進したという側面である(佐藤, 2008)。本報告は、いわばその「博知化」に貢献した一面を、クイズ番組を事例に探るものである。

司会者の問いかけと、それに対する解答者の応答とを中心に進められるクイズ番組は、視聴者を自然に番組に参加させる「民主的な」娯楽番組として、戦後の放送文化をけん引してきた。さらに1980年代以降は、「知的」あるいは「情報エンターテインメント」と謳われることも多く、単なる娯楽にとどまらず、雑学を得る機会としても、今なお放送され続けている。

したがって、クイズ番組という娯楽番組的な「知」に照準することは、人びとが無自覚に「知」とみなしているものに光を当て、人びとが何を「知的」とみなしているのかを、詳細に分析することが可能になると考えられる。とりわけ本報告では、マクロな歴史の見取り図を描き出すことよりも、まずはミクロな内容分析を実施することで、現代日本における「知」の意味づけを探る一助とすることを目指したい。

2. 研究の方法

本報告で事例として取り上げるのは、『クイズ面白ゼミナール』(1981-1988年、NHK)である。数あるクイズ番組のなかでも本番組は、日本のテレビ番組史上最高の視聴率を獲得した、国民的クイズ番組として知られている。大学での授業を模したとされる『面白ゼミナール』では、司会者を「教授」、解答者を「学生」と称し、解答の正誤よりも解説に重点を置き、その際スタジオでセットや実験装置を用いたことで話題となった。

本報告では、実際の放送内容を閲覧することで内容の分析を試みる。番組の閲覧にあたっては、2011年度NHKアーカイブスの

学術利用トライアルからの協力を得た。閲覧した番組数は、クイズ番組史上最高の視聴率（42.2%）を得た回を含めた13回分で、番組冒頭で行われた、解答者の紹介を兼ねて一人ひとりに出題される「ウソホントクイズ」の内容分析を行った。ここでいう番組内容とは、回答者と司会者のやり取りと、フロア（収録スタジオに集められた観客）の反応である。というのも、称賛（「おおー」という声など）や笑いといった台本上に残ることのないやり取りを観察し、記録し、分類することは、「知」が意味づけられ、秩序化されていく、いわば「知」の編成過程の一端を解明することにつながると思ったからである。

ただし今回の報告では、残念ながらその応答の全容を記述することはできない。ここではさしあたり、解答を間違えた際の解答者の応答、ならびに、フロア視聴者の応答にスポットを当てる。

ではなぜ、正答ではなく誤答なのか。正しい答えを導き出すことこそが、クイズ番組における最大のカタルシスをもたらすのではないかという疑問が出てくるように思われるが、ここで正答でなく、わざわざ誤答に注目するのは、誤答に対する視聴者のリアクションにこそ、私たちの暗黙のうちに想定している「知」の基準が表れると考えたからである。

先に示したとおり、テレビを通して全国のお茶の間に届けられるクイズの問題には、何が知っておくべき当然の知識であり、何が知らなくても（世間的に）恥ずかしくない知識なのかといった、いわば知識の境界線を問うような側面がある。私たちの多くはおそらく、誰も知らないような知識を解答者が知っていたときに、解答者に賞賛の声をあげるだろうし、逆に、誰もが知っているはずの知識を解答者が間違えた場合には、解答者に落胆のため息をもらすだろう。そして、本報告でとりわけ注目したいのは、誰も知らないような知識ではなく、誰もが知っていて当然と思うような知識、すなわち日常の「知」の側である。つまり誤答の際のリアクションに注目することで、本報告では、人々が「常識」とみなしている知を確認し、共有し、たとえ視聴者がその知識を知らなかった場合でも、共に解説を聞きながら「博知化」していく状況が分析できるものと考えた。

具体的な分析の手順は、誤答の際に解答者がどのように発言し、フロアにいる観衆からどのような反応がわきおこったかを、筆者が逐一観察・確認しながらリストアップして、回数を数え、特徴のデータ化を試みている。

分析対象となる解答者は延べ156名だが、同一人物が複数回出演しているケースが33回あったため、実際の解答者数は123名である。本報告では、それらの解答者の職業をもとに「シリアス」「ユニーク」「キュート」「その他」の4つに分類し、分析をおこなった。以下ではこの類型をもとに、類型ごとにみられた特徴と、類型には左右されない一般的な傾向との2つの知見を紹介していく。

類型	代表的な解答者	解答者の数	誤答の数
シリアス型	高峰三枝子 三橋達也 三崎千恵子	77	11
ユニーク型	富永一朗 研ナオコ せんだみつお	18	8
キュート型	浅野ゆうこ 岡田可愛 手塚理美	12	7
その他	鈴木啓示 金沢明子 江國茂	16	16
計	—	123	42

表 解答者の類型と人数、誤答の内訳

3. 分析と考察

(1)各類型の特色

はじめに、各類型の簡単な属性と誤答の際のリアクションの特色について触れておこう。

まず、「シリアス型」と名付けた類型は、全解答者中の約2/3を占めており、俳優ないしは女優の肩書きを持つ人々が大半である。おもにNHKにゆかりのあるテレビドラマに出演した経験を持ち、40代から60代の、安定した演技力が評判の役者が名を連ねている。俳優としては一流だが、クイズ番組の解答者としては奇をてらったパフォーマンスをみせることはなく、真摯に解答しようとするスタンスが目立ったため、「シリアス型」と名付けている。

次に、「ユニーク型」と名付けた類型は、全解答者の中では1割強で、コメディアンないしはタレントの肩書きを持つ人々が大半である。民放のクイズ番組やバラエティ番組などへの出演経験を持ち、情報番組の司会やコメンテーターなどを経験した人たちもいる。年齢は30代から50代が中心で、テレビ的な文法を理解し、番組を盛り上げることを無意識のうちにわかまえているような姿勢が目立ったため、「ユニーク型」と名付けた。

さらに、「キュート」と名付けた類型は、全解答者中1割程度を占め、アイドルまたはモデルの肩書きを持つ人々が大半で

ある。他の類型と異なるのは、この類型に位置づけた全ての解答者の性別が女性であり、また、10代後半から20代前半の年齢層で占められている点にある。若い女性特有の、ジェンダー役割を表出するような言動が目立ったために、「キュート型」と名付けた。

最後に、「その他」と名付けた類型には、上記のいずれにも該当しない解答者を分類してある。割合は全解答者中の1割強だが、肩書きはJASRACの会長や脚本家といった「文化人」とでも総称されそうな肩書き（南後・加島2010）から、サッカーやラグビーで名を馳せたスポーツ選手に至るまで多岐にわたる。解答のスタイルもさまざまで、一定のまとまりをもった類型として観察することが難しかったため、今回は「その他」と名付けている。

2) 類型ごとのリアクションの特色

続いて、以上の類型ごとにみたフロア視聴者のリアクションの特徴を記述していこう。

まず、全体の過半を占める「シリアス型」の場合は、解答者が誤答の際にみせるストレートな感情表出が、そのままフロア視聴者の笑いを喚起する点に特徴があった。「シリアス型」は、クイズに取り組むその姿勢が、テレビ番組の収録であるにもかかわらず、非常に素直に表出されやすい。すなわち、正解したときには素直に（少なくとも、素直であるかのように、視聴者には受け止められる）喜び、誤答の際には素直に悔しがる。ふだんはたとえ、時代劇で将軍の役柄を巧妙に演じていたとしても、洋服を着て畑の解答者席で慣れないクイズに解答する姿は、役者という専門職を降りた「素」の立場として、つまり芸能人ではない私たちが番組に出演するのと同様の立場として、フロア視聴者に認識されているように見て取れた。そして、こうした解答者の残念そうな仕草に反応して、笑いが生じている。この意味で「シリアス型」の役割は、視聴者の立場を代弁する役割として、誤答を期待されているように見受けられる。

一方、「ユニーク型」の場合は、解答者が誤答の際にみせるリアクションそのものには、フロア視聴者は反応しない特徴が目立った。つまり、今日のクイズ番組でよく観察されるように、解答者が過剰に「ボケる」ことはなく、フロア視聴者もまた、解答者にそうした期待をこめて番組を眺めていないことがうかがえる。しかし代わりに、解答者が誤答の際にみせる特徴的な傾向は、司会者（アナウンサー）の鈴木健二が彼・彼女らに話しかけることであり、その鈴木とのやりとりに対してフロア視聴者からの笑いが生まれる構図がみられた。先述のとおり、『面白ゼミナール』の特徴は、クイズの解答が正答か誤答であるかに拘らず、詳細な解説をおこない、視聴者にきちんとした知識を提供しようとする傾向が強い。その意味で、「ユニーク型」の役割は、視聴者の理解を深める役割として、誤答を期待されているように見受けられる。

そして、「キュート型」の場合は、解答者が誤答の際にみせるリアクションの一举一動に、フロア視聴者が敏感に反応する傾向が際立っていた。すなわち、上記2つの類型との違いは、第一に、それが「笑い」という反応に留まらない様々な反応を呼び起こした点にあり、第二に、「シリアス型」や「ユニーク型」でみられたそれよりも、フロア視聴者からの大きな反応（ざわめきやため息など）が確認された点にある。他の二つの類型に比べると、年齢層も低めで、職業的なキャリアも短く、解答者には「ジェンダー秩序」（江原2001）の影響を強く感じさせる愛らしい身振りや挙動が突出しており、その意味で、「キュート型」の役割は、視聴者の共感を引き出す役割として、誤答を期待されているように見受けられる。

4. 結論と今後の課題

以上、本報告では『クイズ面白ゼミナール』における解答者の属性を類型したうえで、誤答の際のフロアのリアクションを検討した。一般的な傾向としては、フロア視聴者は解答者の誤答に対し、笑いの反応を示すことが多い。解答者が自信満々に即答し、その答えが外れたとき、視聴者は揺るぎない自信が崩れ去るのをみて、笑いの反応を示す。また、「シリアス型」に顕著にみられるとおり、解答者が困り顔の末に解答し、その答えが外れた際も、視聴者は同様に笑いの反応を示す。いずれの場合も、テレビに出演している有名人の誤答をみることによって、視聴者が何らかの安心感を得ている点では共通しており、1980年代という時代状況において、すでに解答者の知的レベルと視聴者自身の知的レベルを擦り合わせようとする傾向がみとれる。

今回の報告では、さしあたり正答ではなく、誤答の際のフロア視聴者のリアクションに着目して、その特色の記述を試みた。したがって今後は、正答に関するリアクションも含めて分析していく必要がある。また、今回導き出された知見は、『クイズ面白ゼミナール』固有の特徴である可能性も大きいので、今後はさらに別のクイズ番組の内容分析と照合しながら精緻化していく必要もあるだろう。そこで、以下では最後に、本報告での知見を踏まえたうえでの、若干の展望を記しておきたい。

テレビの歴史をひもといた場合、テレビの視聴スタイルが家族視聴から個人視聴へと移行するとともに、視聴者参加形式の

番組も、有名人が（疑似家族的に）レギュラー出演する形式へと移行していったことがよく知られている。クイズ番組でも、解答者席を有名人が占めるようになり、番組は解答者の膨大な知識のストックをもとに短時間で正解が導き出される「技」を楽しむものから、解答者と司会者とのやりとりを楽しむものへと推移していった。

こうしたことから、本報告では1980年代の後半に、娯楽番組、とくにクイズ番組的な「知」の転機を想定している。従来の視聴者参加型のクイズ番組では、出題から解答に至るまでの時間（短時間かどうか）や、解答者の様子（着々と正解を連ねていく度胸ある姿勢）が見どころになっており、解答者の無知が否応もなく暴露される誤答は、恥ずべきことであるというだけでなく、解答者の交代や、持ち点の減点など、良くも悪くも番組の進行を妨げる「できれば避けたいこと」であったと推察される。

ところが『面白ゼミナール』では、仮に解答者が間違った答えを出した場合でも、それ自体が番組の進行を妨げることにはつながっていない。むしろ、司会者による詳細な解説があり、その解説に対してさらに解答者から質問があがるなど、種々のやり取りが生じる（すなわち、番組内容にふくらみが生まれる）ためか、誤答が出ることを期待されているような流れも確認できる。加えて、逆に正解という判定が下された場合でも、それが偶然（まぐれ）であることが公言されたり、問題に関する解説にうなずいたり、メモを取ったり、隣に座る者どうして話し合ったりする解答者たちの姿が、カメラにはしっかりと映し出されている。

すなわち本報告は、解答を知らないことへの意図的な表明、ないしは非意図的な表出がテレビに露骨に映し出されるようになった点に、日常的な「知」の変容の一端、より正確には、「知らない」という状況に対する、私たちの態度の変容の一端を見いだそうとする試みだった。その試みはまだ十分に成功しているとはいいがたいが、「知らないことは恥ずかしいことではない」——こうした態度と反応を探る意味において、『クイズ面白ゼミナール』は、「正解／不正解」が機械的に判定される番組と比べて、人びとの日常生活における教養や情報のありかたを観察する、格好の分析素材であるように思われる。

参考文献

- 石田佐恵子・小川博司編著(2008)『クイズ文化の社会学』世界思想社
- 太田章一(2002)『社会は笑う』青弓社
- Goffman, Erving (1967) "The presentation of self in everyday life", NY.: Doubleday. (=石黒黎訳『行為と演技』1974,誠信書房)
- 南後由和・加島卓 編(2010)『文化人とは何か』東京書籍
- 佐藤卓己(2008)『テレビ的教養』NTT出版
- 竹内洋(2003)『教養主義の没落』中央公論新社
- Hoerschelmann, Olaf. (2006) "Rules of the Game", New York: State University of New York Press.
- Fiske, John, Hartley John. (1978). "Reading television", London: Methuen. (=池村六郎訳『テレビを"読む"』1991,未来社)
- Luhmann, Niklas (1996) "Die Realität der Massenmedien", Westdeutscher Verlag GmbH Opladen. (=林香里訳『マスメディアのリアリティ』2005,木鐸社)